

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	サルトルとブルジェ, 二つのボードレール論をめぐって
Author(s)	重見, 晋也
Citation	フランス文学, 22 : 20 - 28
Issue Date	1999-06-21
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00041027
Right	
Relation	



サルトルとブールジェ，二つのボードレール論をめぐって

重見晋也

はじめに

サルトルの『言葉』は、サルトルの文学への回帰として大いにもてはやされ、書評にも様々な形容が施され、中には「サルトルはポール・ブールジェを模倣したのか？」というものまであった。¹⁾また1951年にジャック・ロランは*Paul et Jean-Paul*の中で、「サルトルの努力は、(ブールジェを)刷新するというよりも(現代に)移し替えることの方に注がれたのだ」²⁾とも述べている。

サルトルとブールジェの関係を全体的に捉えることはひとまずおき、本論では、二人のボードレール論を取り上げる。というのも、後述するように、サルトルの『ボードレール』は、ブールジェの「ボードレール」を念頭に置いて書かれていると考えられるし、そのことが作品に影響を及ぼしているとも考えられるからである。

第一章と第二章では、ブールジェとサルトル、それぞれのボードレール論を「出来合いのボードレール像」という点から考察する。そして第三章においては、二人のボードレール論の立場の相違を中心に、ブールジェのサルトルに対する影響について考察する。

1. ブールジェのボードレール論

ポール・ブールジェの*Essais de psychologie contemporaine*³⁾ (以下*Essais*と略す)は、1881年11月15日号から1885年10月1日号の*La Nouvelle Revue*誌に《Psychologie contemporaine-Notes et portraits》というタイトルで掲載された十の考察が基となっている。これらの作品のうち、ボードレール論はフロベール論とともに、1883年の末に*Essais de psychologie contemporaine*として出版され、1885年の末にはルコント・ド・リール、ゴンクール兄弟などを扱った第二巻が刊行されている。その後、1899年にプロン社がブールジェ全集を刊行するにあたり、全集の第一巻に、従来二分冊となっていた作品を一つにまとめて補遺をつけ加えたのであり、それが現在の*Essais*になっているのである。

ポール・ブールジェにとってボードレール論が特別な意味を持っていたことは、*Essais*の中での「ボードレール」の位置を確認するだけでも十分であろう。「ボードレール」は*Essais*の巻頭を飾る章であり、*La Nouvelle Revue*誌へ発表された時期も*Essais*の中で最も古く、1881年11月15日号においてである。また、*Essais*を価値付けていると考えられる「デカダンスの理論」《*Théorie de la Décadence*》は、このボードレール論の最後の一章を成してい

る。

しかし、ブルジェにとって特別だったのは、彼が書いたボードレール論であったというよりは、むしろ詩人ボードレールだったようである。なぜならば、*Essais*の他の考察においては一貫して客観的態度を保っているにもかかわらず、ブルジェはボードレールの詩との出会いを《exceptionnelle》、《jusqu'alors inconnues》あるいは《fascinent》などの言葉を用いて、如何に決定的なものであったかを強調しているからである。

ところで、ブルジェのボードレール論の論点は次の二点である。第一に、一般に「病的」《“malsain”》というレッテルを貼られる詩人を再定義し、「次にくる世代」の「非常に卓越した知性の集団」への影響を示すこと。そして第二に、ボードレールに貼られた「病的」さのレッテルを、社会と個人との相剋という観点からとらえ直し、ボードレールの生きた社会の「デカダンスの理論」を描き出すことである。

まず「病的」というレッテルについて見てみる。

[Baudelaire] était d'une race condamné au malheur. C'est l'écrivain peut-être au nom duquel a été accolée le plus souvent l'épithète de 《malsain》. Le mot est juste, si l'on signifie par là que les passions du genre de celles que nous venons d'indiquer trouvent malaisément des circonstances adaptés à leurs exigences. Il y a désaccord entre l'homme et le milieu. Une crise morale en résulte et une torture du cœur. Mais le terme de 《malsain》 est inexact, et devient injuste s'il emporte avec lui une condamnation du poète, absolue et sans appel. (pp.7-8)

「病的」というイメージが既にボードレールに貼りつけられていたことは、この言葉がギュイメによって括られていることから察することができる。ボードレールに貼りつけられた出来合いのイメージに対して、ブルジェは言葉の意味をずらすことによってボードレールを擁護しようとしている。すなわち、ブルジェにとってこのレッテルは、決してボードレールに対する「中傷」として捉えるべきものではなく、ボードレールの「情熱」と社会との関係を示すものに他ならない。ブルジェによれば、カトリシズムを背景にもつ神秘主義的な情熱であれ、パリの頹廢に感化されて放蕩三昧をしているときであれ、常に分析的な精神で自らの興奮を書き留めるような「情熱」こそが、ボードレールの示した「情熱」の最たるものである。⁴⁾そして、「病的」さのレッテルは、そうした「情熱」的なボードレールと社会との不和に由来するものと、ブルジェは述べている。このようにしてブルジェは、ボードレールを自らの欲望と現実との間で苦悩する詩人という、別のイメージを導き出す。

さらにブルジェは、ボードレールの「情熱」に見られるペシミズムを指摘する。ブルジェによれば、ボードレールのペシミズムは神秘家としての詩人の側面に由来している。すなわち、神秘家としてのボードレールは、カトリック教育を受けたものならもつであろう精神世界に対する形而上的、抽象的な信仰を拒否し、常に具体的に「見る」ことを求め、感覚的で具体的な信仰を重んじる。ボードレールが阿片やアルコール、さらには読書への信仰に耽るのはこのペシミズムに由来している。そして、そこから現実と個人の精神的欲求との間の埋め尽くせない虚ろとしての《*mélancolie*》を埋めて、「人工楽園」を築き上げようとする詩人の姿が明らかにされる。

ブルジェによれば、こうしたボードレールの特異性が、後の作家たちに大きな影響を与えた点である。それは何よりも、ブルジェが提示する神秘家・リベルタン・分析家という詩人の三位一体を包括する、デカダンとしてのボードレール像である。

周知のようにブルジェは、このボードレール論で「デカダンスの理論」(pp.13-18)を展開している。ブルジェにとって「デカダンス」とは社会が有機的に統合されていない状態である。そして、文学における「デカダンス」も存在するのであり、それは「作品の統一が解体して頁が独立し、頁が解体して文章が独立し、文章が解体して単語が独立する」(p.14)ような文体によって特徴づけられるのだと述べている。その上で、ブルジェはボードレールを一挙に自らのデカダンスの理論に組み込む。

Baudelaire, lui, eut le courage d'adopter tout jeune cette attitude et la témérité de s'y tenir jusqu'à la fin. Il se proclama decadent et il rechercha, on sait avec quel parti pris de bravade, tout ce qui, dans la vie et dans l'art, paraît morbide et artificiel aux natures plus simples. (pp.16-17.)

こうして、ブルジェは、「病的」というレッテルを、「デカダン」というもう一つのレッテルに貼り替えるのである。

II. サルトルのボードレール論

サルトルもブルジェ同様に、一つの固定観念を検証するという形で『ボードレール』⁵⁾を進めている。それはまず、「彼は自分に値した生涯を送らなかった」《*il n'a pas eu la vie qu'il méritait*》(p.17)⁶⁾というボードレール論の第一文から既に現れている。この「固定観念」がサルトルの論の出発点としているボードレール像である。

しかしこの固定観念に、サルトルは直ぐさま疑問を投げかける。

Pourtant, à la réflexion, un doute surgit:[...]: *ce pervers* a adopté une fois pour toutes la morale la plus banale et la plus rigoureuse, *ce raffiné* fréquente les prostituées les plus misérables, c'est goût de la misère qui le retient auprès du maigre corps de Louchette et son amour pour 《l'affreuse Juive》 est comme une préfiguration de celui qu'il portera plus tard à Jeanne Duval; *ce solitaire* a une peur affreuse de la solitude, il ne sort jamais sans compagnon, il aspire à un foyer, à une vie familiale, *cet apologiste de l'effort* est un 《aboulique》 incapable de s'asterindre à un travail régulier; [...]

(p.17, 強調筆者)

これらの指示形容詞のついた名詞は、論の最初にあってそれ自身明確に指し示すものを持たない。そのため、読者の抱いているボードレール像に直接呼びかけ、読者にその解釈を委ねるといった機能を持っているといえる。またそれ以外にも別の箇所では、《fameux》という形容詞をつけて《lucidité》, 《regard》, 《faiblesse charnelle》, 《dolorisme》といった名詞によってボードレール像が提示されてもいる。これらの名詞であらわされるボードレールの属性は《fameux》という形容詞によって形容されているだけで、これらの詩人像は読者の解釈に委ねられるのである。

このようにしてサルトルは、出来合いのボードレール像を読者に喚起する。しかしそれだけではなく、サルトルはそれらの詩人像を崩そうとしている。例えば、結論においてサルトルは、ボードレールが「自分に価した生涯を送らなかった」という固定観念とは反対に、「人間が自らについて行う自由な選択は、彼の宿命と呼ばれるものと完全に一致する」《le choix libre que l'homme fait de soi-meme s'identifie absolument avec ce qu'on appelle sa destinée.》(p.179)として、ボードレールの生のすべてをボードレール自身の責任に帰し、最終的に出発点となった固定観念を否定している。このことはサルトルの目論見を良くあらわしているだろう。

ところで、『ボードレール』におけるサルトルの論点は、ボードレールの生と作品を、母親の再婚を機に全てから疎外された自己というあり方を選択したという「根源的選択」を中心に再構築することにある。この「根源的選択」を出発点として、ボードレールの生の変遷が検証されていくわけであるが、詩人の生の全てはこの根源的な態度を選びとったボードレール自身の責任へと還元されている。

このようにして描き出されるボードレール像は「悪循環」の運動⁷⁾であらわされる。それは、自己閉塞した永遠の運動性であり、ボードレールが二つの選択肢の間で揺れ動くさまを表している。

Cessât-il [=Baudelaire] un instant de l'affirmer [=l'ordre établi], sa conscience redeviendrait d'accord avec elle-même, le Mal d'un seul coup se transformerait en Bien, et, dépassant tous les ordres qui n'émaneraient pas de lui-même, il émergerait dans le néant, sans Dieu, sans excuses, avec une responsabilité totale.

(pp.67-68)

このように、サルトルが提示するボードレールは、優柔不断にも悪から善に容易に変わってしまうのであり、サルトルはそれを「悪循環」(p.79)と形容しているのである。このことは、サルトルが、固定した詩人像を描き出すのではなく、ボードレールの生の揺らぎをその運動性においてとらえようとしているのだ、と考えられるだろう。

III. サルトルのブルジェ批判

サルトルもブルジェも、出来合いのイメージから出発して、各々のボードレール論を展開していることが分かった。ブルジェは「病的な」ボードレール像を「デカダンスの理論」へと読み変えることにより、ボードレールを当時のフランス社会の犠牲者として描き出す。一方でサルトルは、ボードレールの生の「悪循環」を暴き出し、優柔不断にして懐古主義的なボードレール像を提示している。二人のボードレール論の相違は、何に由来しているのだろうか。本節では、二人の論の立場の違いという観点から考察する。

二人の論は全く違っているというわけではない。サルトルが、「根源的選択」という「分解できない全体性」についての言及を別にすれば、ボードレールの「歴史は、きわめて緩慢な、きわめて悲痛な、分解の歴史であった」(SARTRE, pp.178-179)⁸⁾と述べる時、その言葉は、ブルジェがボードレールの生をデカダンスだと定義し、有機的な完全性ではなく個別な要素に分解されたもの、すなわち首尾一貫していない生であるという指摘と呼応しているといえる。また、ブルジェが結論として導き出した、デカダンとしてのボードレールや、さらに象徴主義の詩人たちへの影響についてもサルトルは認めている。

Ainsi Baudelaire connaîtra-t-il la volupté amère de la décadence, dont il communique le goût, comme un virus, à ses disciples symbolistes.

(SARTRE, p.159)

このようにいわば、サルトルの論はブルジェの考察を取り込む形にもなっているといえる。

ところで、前述したポール・ブルジェの*Essais*の出版の歴史をたどり直してみると、サ

ルトルが参照した版がどれであれ、フロベール論とボードレール論とは、*La Nouvelle Revue* 誌に発表された時をのぞけば、常に一冊の中に収録されてきたことが分かる。

それ故、ブールジェのフロベール論についてサルトルが『存在と無』で言及していることも考えあわせると、サルトルが『ボードレール』の執筆に際して、ブールジェのフロベール論だけではなく *Essais* の巻頭に収められたボードレール論も読んでいたと考えることができる。つまり、サルトルの『ボードレール』は、その度合いは別にして、ブールジェのボードレール論を念頭に置いて書かれたと考えることができるのである。

その一方で、両者のボードレール論には相違も見られることは前述した通りである。それでは二つのボードレール論はどのような立場で書かれたかが問題になってくる。

ブールジェの *Essais* については、先ず序文が手がかりになる。

Le lecteur, en effet, ne trouvera pas dans ces pages, consacrées pourtant à l'œuvre littéraire de cinq écrivains célèbres, ce que l'on peut proprement appeler de la critique. Les procédés d'art n'y sont analysés qu'autant qu'ils sont des signes, la personnalité des auteurs n'y est qu'à peine indiquée, et, je crois bien, sans une seule anecdote. Je n'ai voulu ni discuter des talents, ni peindre des caractères. Mon ambition a été de rédiger quelques notes capables de servir à l'historien de la vie morale pendant la seconde moitié du XIXe siècle français.

(BOURGET, p.435)

ブールジェはこのように述べ、*Essais*における自らの試みを「19世紀後半のフランスにおける精神生活」を描き出すものだと位置づけている。また、1894年1月にAlphonse N. Van Daellに宛てた手紙でも、「私がそれまでに最も深く感銘を受けた作品を通して私の世代のある精神的な肖像を素描してみようと思立ったのでした」(BOURGET, p.454) と、*Essais*の企図を語っている。このように *Essais* は、ブールジェ自身にとっては本来文芸批評ではないのであり、⁹⁾ブールジェが一つ前の世代から受け継いだものを見出そうとする、ある意味で社会心理学的な努力だったのである。

事実、ボードレールについても、ブールジェは、前述した詩人の三つの側面がそのまま当時のフランス社会から影響を受けたものだと考えているのであり、当時のフランス社会の状況をボードレールという個人に直接適応している点が特徴的である。

それに対してサルトルの『ボードレール』は、『存在と無』の中で展開された「実存的 정신分析」の実践である。¹⁰⁾『存在と無』におけるサルトルの論点は、従来の経験論的な心理学が全てを「欲望」の名の下に説明づけようとしている点を指摘し、こうした方法では個

人の個別な生を説明することができないと批判することになった。こうした誤謬を正すためにサルトルが導入したのが、「根源的選択」という概念である。そしてさらにサルトルは、その概念を中心に「他者の観点から」(SARTRE, E. *et N.*, p.631) 個人の生の「超越」あるいは「存在の欠如」(*ibid.*, p.632) という契機を心理学に導入し、「集合ではなく一つの全体」(*ibid.*, p.628) として人間をとらえようとしていたのである。

ところで、興味深いことに、サルトルの「実存的精神分析」についての考察は、ブルジェの *Essais* を批判することから始まっている。

Un critique, par exemple, voulant tenter la «psychologie» de Flaubert, écrira qu'il «paraît avoir connu comme état normal, dans sa première jeunesse une exaltation continuelle faite du double sentiment de son ambition grandiose et de sa force invincible...» L'effervescence de son jeune sang se tourna *donc* en passion littéraire, ainsi qu'il arrive vers la dix-huitième année aux âmes précoces qui trouvent dans l'énergie du style ou les intensités d'une fiction de quoi tromper le besoin d'agir beaucoup ou de trop sentir, qui les tourmente.

(SARTRE, E. *et N.*, p.617)¹¹⁾

サルトルはブルジェのフロベール論を取り上げ、ブルジェがフロベールを「大いに行動しはげしく感受したいという欲求」とこの欲求に付随するいくつかの欲望の組み合わせからのみ説明しようとしている点を指摘している。そして、ブルジェがフロベールにおいては「自己の偉大な野心と自己のおさえがたい力との二重の感情から由来する不断の昂揚を、自分の正常な状態として、知っていたように思われる」と指摘しただけで、《*donc*》と述べて、フロベールが文学に対して情熱を持つようになったことに言及するような、分析の不十分さを批判している。¹²⁾

しかし、サルトルのブルジェ批判が、前述したブルジェの企て、作家を通してその作家が属した「精神生活」を描き出すというブルジェの企て自体に向けられているわけではない。『存在と無』における批判は、少なくともブルジェについては、分析の不十分さに向けられている。

実際、『ボードレール』においてサルトルは、ブルジェ流ともいえる分析も展開している。例えば、ボードレールの生きた社会を産業化（自然破壊）の途上にあつたと分析し、ボードレールもまたそうした流れに飲み込まれ、自然に対する無関心を抱くようになったとの分析 (SARTRE, p.97) など、その良い例であろう。このように、『ボードレール』におけるサルトルの分析は、『存在と無』での立場を基本に据えつつも、ブルジェの目指し

たような社会とボードレールとの関係についても考察を忘れていないのである。以上のように見てくると、サルトルがブルジョエの考察を方法的には批判しつつも、自らの方法論の実践としては、非常に部分的にはあるが継承していることが分かるのである。

おわりに

サルトルが発表した伝記作品を貫いているのは、「如何にして人は何かを書き、何か想像的なものを語るようになるのか?」、という問題意識である。¹³⁾さらに、『家の馬鹿息子』において、フロベールを考察対象に選んだ理由の一つとして、「1848年の夢見るブルジョワの抱いていた想像的社会世界とは如何なるものだったか?」¹⁴⁾という問いに答えることができるからだ、と述べている。この言葉は、まさにブルジョエが *Essais* の序文において述べている「精神生活」を描き出すことに他ならない。こうしたサルトルの発言は『ボードレール』の執筆後30年近く経ってからのものではあるが、『ボードレール』を貫く問題意識であったとも考えられるのである。

ところで、『ボードレール』におけるサルトルの分析が、批評家たちから「不当な論告文」¹⁵⁾であると非難されるほど、ボードレールの生を断罪していると受容されたことも事実である。

それ故、サルトルが『ボードレール』を、「とても不十分だし、あまりにもひどい」¹⁶⁾作品だと述べるとき、それはブルジョエのボードレール論を意識するあまり、社会の中に詩人を十分に位置づけることができなかつた自らの作品を振り返っていると考えることができるのではないだろうか。

注

¹⁾ Cf. Annie COHEN-SOLAL, *Sartre 1905-1980*, coll. 《folio/essais》 116, Gallimard, pp.731-732.

²⁾ Jacques LAURENT, *Paul et Jean-Paul*, cité par COHEN-SOLAL, in *op. cit.*, p.532.

³⁾ Paul BOURGET, 《Baudelaire》, in *Essais de psychologie contemporaine*, coll. 《tel》 233, Gallimard, éd. de 1993. 尚、本節において本文中にある頁番号については、同書を参照。

⁴⁾ Cf. *ibid.*, pp.4-7

⁵⁾ Jean-Paul SARTRE, *Baudelaire*, coll. 《folio/essais》 105, Gallimard, 1947 (éd de 1975).

⁶⁾ 本節において、本文中にある頁番号は、サルトル前掲書を参照のこと。

⁷⁾ 『ボードレール』における「悪循環」については、拙著「『ボードレール』におけるサルトル的戦略」,「広島大学フランス文学研究15」,広島大学フランス文学研究会,1996年, pp.40-55

を参照のこと。

⁸⁾本節で本文中に示した頁番号では、サルトルについては『ボードレール』を、ブールジェについては*Essais*を指し示す。

⁹⁾但し、現在の版には《*Études littéraires*》と副題が付されている。

¹⁰⁾Jean-Paul SARTRE, *l'Être et le Néant*, Gallimard, 1943 (éd. de 1970). (以下*E. et N.*と略す。) また、サルトルは『ボードレール』の前半を、ボードレールの「根源的選択」とそれを中心にした詩人の生の分析に費やしている。Cf. SARTRE, *Baudelaire*, pp.21-26.

¹¹⁾引用二行目の《*paraît avoir connu*》以下最後までは、ブールジェのフロベール論からの引用。Cf. BOURGET, *ibid.*, pp.88-89.

¹²⁾SARTRE, *l'Être et le Néant*, p.617.

¹³⁾Jean-Paul SARTRE, 《Sartre par Sartre》 in *Situations, IX*, Gallimard, 1972, p.134.

¹⁴⁾*Ibid.*, p.119.

¹⁵⁾Georges BLIN, 《Jean-Paul Sartre et Baudelaire》, in *Le Sadisme de Baudelaire*, José Corti, 1948, p.123. また『ボードレール』に対する批評については、拙著、「サルトルの*Baudelaire*における詩人の成功と失敗」、『フランス文学』, No.21, 日本フランス語フランス文学会中国・四国支部, 1997, pp.9-17を参照のこと。

¹⁶⁾Jean-Paul SARTRE, *ibid.*, p.113.